

京大本紫明抄  
天理本河海抄

引用漢籍注考證稿〔帚木〕

中

枋尾 武

光源氏物語卷第二帚木紫明抄

河海抄卷第二帚木

〔20〕〔帚木〕（紫一273・292。河二414・219下。大成修。新釋一451。）

〔紫〕よはぢれたらうみつらなとにはひかくれぬかし

〔河〕うみつらなとにはひかくれぬお

・周太子太子泰伯 仲雍 讓弟

上海類 又海濱 日本紀ニハラムミヘタト讀リ

季子歷 隱荆蠻 海濱 論語

海頭 伊勢物語 異名本

周太子泰伯 仲雍 讓弟 季歷 隱荆蠻 海濱 論語

〔考證〕「うみつら」の拡張を述べる。

○論語泰伯第八 論語注疏第八 魏何晏集解 趙宋邢昺疏（十三經注疏）解（三冊本）

「子曰泰伯其可謂至德也已矣。三以天下讓，民無得而稱焉。」（集解）王曰泰伯，周太王之長子，次弟仲雍，少弟季歷。季歷賢，又生聖子文王。昌必有天下，故泰伯以天下三讓於王季，其讓隱（下略）（疏）鄭玄注云：「中略」大王疾，太伯因適吳越採藥，太王歿而不返，季歷為喪主，一讓也。季歷赴之，不來奔喪，二讓也。免喪之後，遂斷髮文身，三讓也。二讓之美，皆隱蔽不著。（中略）正義曰：云泰伯，周太王之長子云云者，史記吳世家云：「下略」。

●京都大學附屬圖書館藏「論語抄」（室町末江戸初寫）二卷

「泰伯（中略）中雍ヲモソレテ荆蛮へ走テ不飯ホトニ（中略）太王ノ病スル時ニ幾ラ采ニガ為ニ荆州南蛮ノ辺ニ起テ次男仲雍ヲ知テ心去ル（中略）荆州ハ東南テ地カ卑イホドニ水ガツイテ常ニ在水中」

●史記 卷三十一 吳太伯世家第一 標點本 1445

「一」 吳太伯，二 太伯弟仲雍，三 皆周太王之子，而王季歷之兄也。季歷賢，而有聖子昌，太王欲立季歷，以及昌。於是太伯、仲雍二人乃奔荆蠻，文身斷髮，示不可用，以避季歷。季歷果立，是為王季，而昌為文王。太伯之奔荆蠻，自號句吳。荆蠻義之，從而歸之千餘家，立為吳太伯。（注）（二略之）

〔三〕 集解 應劭曰：「常在水中，故斷其髮，文其身，以象龍子，故不見傷害。」 正義 江熙云：「太伯少弟季歷生文王」

昌，有聖德。太伯知其必有天下，故欲傳國於季歷。以太王病，託採藥於吳越，不反。太王薨而季歷立，一讓也；季歷薨而文王立，二讓也；文王薨而武王立，遂有天下，三讓也。又釋云：「太王病，託採藥，生不事之以禮，一讓也；太王薨而不反，使季歷主喪，不葬之以禮，二讓也；斷髮文身，示不可用，使歷主祭祀，不祭之以禮，三讓也。」

〔四〕**〔集解〕**宋忠曰：「句吳，太伯始所居地名。」**〔案〕**荆者，楚之舊號，以州而言之曰荆。蠻者，閩也，南夷之名；

蠻亦稱越。此言自號句吳，吳名起於太伯，明以前未有吳號。地在楚越之界，故稱荆蠻。顏師古注漢書，以吳言「句」者，夷語之發聲，猶言「於越」耳。此言「號句吳」，當如顏解。（劉宋裴駟集解，唐司馬貞索引，唐張守節正義）

\***〔論語〕**及**〔史記〕**の右の引用文において「海濱」の語見えず。**〔論語〕**の注にあるいは抄物に用例がある可能性がある。『河海抄』の戀字は變字であらう。

○日本書紀 乾元本（天理圖書館善本叢書 古代史籍集）

卷二 283 「**〔聖德太子集〕**之海邊」（大系二84）

卷二 274 「行<sub>レ</sub>吟<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>聯<sub>レ</sub>」（大系二84の）

\*『書紀』に海類の用例なし。類語に海疆、海峽、海頭等あり。

○伊勢物語 七二（『伊勢物語』に就きての研究 校本篇）

「いせおりのあけひのひみつらむやくに浪のいとしくくにつをみて」

〔是〕妹背尾張境迺海頭乎行爾浪最白立乎視而」

●『萬葉集』海邊（ウミヘ）、宇美邊（ウミヘ）

●左傳 二二三 宣公二年春 注疏 三〇

「其停諸江用以實海濱亦唯命」

(21) 〔帶木〕（紫）27. 23. 24. 河 21. 22. 20. 大成 45. 新釋 147

〔紫〕ひたすらにいとへいと。大毛詩・足如文集（河）ひたすら。大毛詩 足如同 白氏文集

・永 日本記

ひたすらとわかお思はずくだの氷さへかりくとのみ  
みぢわたららん 後撰

永 同 日本紀

後撰  
ひたすらとわか思はずくだの氷さへかりくとのみ  
みぢわたららん

〔考證〕

○毛詩卷十八「二 古注十八<sub>2</sub> 11<sub>2</sub> 12<sub>2</sub> 注疏十八<sub>2</sub> 5<sub>2</sub>。大雅 滄海之竹 雲漢

「旱既大甚（鄭箋）大音泰（大を太とした本文もある）

○日氏文集（那波本四例、103卷と74。金澤又庫本<sub>8</sub>。2253卷と249<sub>4</sub> 金194<sub>7</sub>。2775巻と716<sub>0</sub>。2232巻と1520<sub>2</sub>。金163<sub>6</sub>）

○卷十七「九江春望」「此地何妨便終老（五言） 正如（五言） 元是九江人（金）

○卷十二「和祝蒼華」「正如（五言） 剃頭僧（五言） 豈安中冠王（金）

○卷十七「獨吟」「正如（五言） 身後有何事、應向人間無所求（那）

○卷五「詠懷」「處分（五言） 貧家殘活計、正如（五言） 身後（五言） 貴人相識（金）

○日本書紀（大略）「元本<sub>16</sub>」「今（三言） 當永去（國史本系<sub>38</sub>）」

●石義抄（佛下木<sub>3</sub>）「大（七言） ステ」

\* 正 正如スルスミは身に何一つ持たないこと。無一物の意。ひたすらは跡かたもなくすつかりの意。字義として正如は適例ではない。

(22)〔常木〕（紫<sub>27</sub> 河<sub>23</sub> 大<sub>45</sub> 新釋<sub>46</sub>）

〔紫〕ふるこいら、後達也。女の惣名也

・後漢書云周礼曰王者立后 鄭玄註礼記云后之言後 言在夫之後 以女謂後達

雜藝哥

西の京なるこいらはあや千疋かとり千疋くりあけてをるとかしのみきすやねきひきすやきりくすのぞとかたからおきの花

ヤ

・黒鳥子三哥

女のくくにかみの宿の後達は 俗云後付

〔考證〕

○『後漢書』(四叢 卷十上) 皇后紀十上<sup>1a</sup>。和刻本(汲古書院)十上<sup>1a</sup>。標點本<sup>抄</sup>②)

「周禮」王者立后、鄭玄注禮記曰后之言後、言在夫之後也。

○『禮記』曲禮下(古注十三經一<sup>2a</sup>)

「天子之妃曰后、后之言後也。」

○『白氏文集』諷諭三續古詩十首之五(那波本、四叢二<sup>2a</sup>)

「宜當備嬪御、胡為守此獨。」

〔河〕ふるこいら 古後達 こいらは女の惣名也 古は年  
老たる女也

御 白氏文集 後漢書注鄭玄曰礼記云后之言後 言在夫之後 故以女謂後達 伊勢物語云あるこいら

のつはねのまへをわたりけるに 後達 礼記の文分明也 但御之字も又有其謂歟 伊勢物語のこいらといふも御の字に俗にはこいらといふ皆此字也 かしづく心也

西京なるこいらはあや千疋かとり千疋くりあけてをるとかしのひきすやねきひきすやきりくすのぞとかたからおきの花や

・黒鳥子三哥 かのくくにかみの宿の後達は 俗云後付

○『日本書紀』十四雄略天皇（天理兼石本分れ。國史大系370。上）

「七年（中略）是歲（中略）便欲自求種媛オホミ為女御ミコト」

○雜藝歌 『梁塵秘抄口傳集』卷十（岩波古典大系42）

「又我獨リ雜藝集をみろけて」

○黑鳥子三歌 同右44

「足柄黑鳥子、伊地などやうの大曲の秘藏の歌どもは（黑鳥子はクイナの別名。所引雜藝歌は散逸歌とされる。）

(23)〔帝木〕〔紫〕第133。河ニタ 大成45。新釋(46)。

〔紫〕うちひそみぬ 嘸ヒソム

・口出ヒソム万 口ヲスクムレハ口  
ノイフル故也

も、とせにおひくらひそむよとむ

とむわれはいとほしこひはますと

も万第  
家持

をいふ也

万第  
四

も、とせにおひくらひそむよとむとむ我はいとほしこひはますとむ家持

擗眉 又擗眉 是も泣躰  
八雲抄云すこしおりほけなる躰也

〔考證〕

●佛中の「嘸」クナヒソムヒソム ●字類抄下イ・嘸ヒソム笑也一眉（前田家本277・黒川本69）

○『萬葉集』四下七六四 大伴宿禰家持和歌一首（塙書房版 昭57・1・91）

百手亦 老古出而 手余牟友 吾音者不厭 戀者益友

桂宮本「おいとちひそむ」(老古出而) 古出の出典は『遊仙窟』ではなく『萬葉集』である。

○『文選』王充考(逸)「曾靈光殿賦」(胡刻本李善注19a. 25a. 和刻本六臣注33a. 27a. ①).

(和刻本)「懣懣ウツクツク而合アヒ。善曰(中略)孟子曰ウツクツク而アヒ。懣懣憂貌(中略)翰曰(中略)懣懣ウツクツク而アヒ合アヒ憂ウツクツク也。」

○『遊仙窟』(金剛寺本、醍醐寺本、眞福寺本、陽明文庫本、ほ無刊記本)

(金)「獨ウツクツク而アヒ結アヒ」(因ウツクツク埴書房)

(醍)「獨ウツクツク而アヒ結アヒ」(波古書院)

(眞)「獨ウツクツク而アヒ結アヒ」(貴重古典籍刊行會)

(陽)「獨ウツクツク而アヒ結アヒ」(分ウツクツク思文閣)

(無)「獨ウツクツク而アヒ結アヒ」(44)

\*金剛本注に次のように見える。「咲ウツクツク特ウツクツク宜ウツクツク」(注)懣懣ウツクツク也。皺ウツクツク也。皺ウツクツク也。音ウツクツク府ウツクツク

隣反(無本注と異同あり。48因ウツクツク。(無2278)。(醍)「宜ウツクツク」(眞)「宜ウツクツク」(陽)「宜ウツクツク」(分)。

○『八雲御抄』卷四言語部、世俗言(『日本歌學』大系別巻三34頁。片桐洋)「八雲御抄の研究研究編 和泉書院13. 70頁)

「ひそみ(すこししめりたる也。ほけたるやう「すこ」)。

「紫」にこりにしめるほとりもなまふかひにては「河」にこりにしめるほとりも

(24)「帯木」(紫)28初, 23下。河22初, 22下。大成44。新釋(46)。

「紫」にこりにしめるほとりもなまふかひにては「河」にこりにしめるほとりも

かへりてあしきみちにもたよみぬへくせ

・はちすはのにこりしよぬ心もてなむかはつゆを

たまとあむむく古今通昭

・古蓮葉のにこりしよぬ心もてなむかは露を玉と  
あむむく古今通昭

〔考證〕

古今集三夏心 ばちすの露を見てよめる 僧正通昭

妙法蓮華經 卷五 從地踊出四第十五偈 (大正藏卷三九七五)

「不染世間法 如蓮華在水」

●『八雲御抄』卷四 料簡言 (『日本歌學』大系別卷三、四三)

「一、はちすはのにこりしよぬ心もてなむかはつゆをたまとあむむく」

はちすはのにこりにしよぬ心といへるは 法花終涌出四四云「不染世間法如蓮花在水といへる心也。世にまざる心をば」はちす「葉」の水にはおひながつ、水にまざるたとある也。さる心にては、などかは露をも玉とあむむくといふ也。あむむくとは、あひする「心」也。なべての人のあむむくといへる心にはあらず。

●『白氏文集』卷十五 放言五首之一 (那波本云、岩波新大系古今集、注引之)

「草葉有權終非火 荷露雖圓豈日天珠」

(25) 帝木 (紫一巻、二巻、三巻、河二巻、三巻、220号、大成44、新釋一474)

〔紫一〕なむかはぬのこまなるためし (河)つなむかはぬのこまなるためし

もけにあやせし

觀身岸願離根草 論命江頭不繫舟 朗詠

・觀身岸願離根草 論命江 古人尺一同に此詩を載たり然而其心与物語相違する也



頭不繫舟

詩者以是無常に譬へたり 物語は浮跡の心之 文選に在之

乎若不繫之舟 莊子注又實論 鵬鳥賦曰野鳥入室主人將去請問 服予去何之此心之  
予以曾見勸得之潛通作者之意趣 努力自愛々々

〔考證〕

○『和漢朗詠集』下、雜、無常の傳、浮舟本(陽明叢書)下、漫流本(日本名跡叢刊)下(1)

「翻身岸額離根草 論命江頭不繫舟」(陽明)

\* 古人尺 古人の注尺(釋)。

○『文選』卷十三、賈誼 鵬鳥賦 (胡刻本李善注) 20a。和刻本公臣注) 22b。

「野鳥入室主人將去 請問于鵬余去何之」(中略) 澹乎若深淵之靜。泛若木不繫之舟。遂

善曰莊子。老聃曰其居也淵而靜。其唯人心乎。鵬冠子曰。泛泛乎若不繫之舟。(和刻)

○『南華真經(莊子)』卷四外篇在宥上(四部叢刊)四〇七)

「老聃曰(中略)其居也淵而靜其動也縣而天(中略)其唯人心乎」

○『三寶繪序』(古人云事有身觀岸額離根草命論江邊不繫船(三寶繪詞古詩文庫)

○(帯木)〔卷一〕。河(字) 220a。大成44。新釋(外)。

〔河〕うなづく 點頭 或領狀 同漢書 顏許淮南子 領許遊仙窟

〔考證〕

\* 『漢書』、『淮南子』、『遊仙窟』には右の用例は見當らず。點頭はうなづくの意。

●『白氏文集』卷三三和微之詩字三首之十六、和酬鄭侍御東陽春悶放懷追越遊見寄詩（金澤本五三〇四、邦波本四三〇、國譯漢文大成續）後集二四）

「嘉魚點頭時」（歎聽我此言不知疲）（金澤本。點頭はうなづく意）。

●『新撰字鏡』（天治本五〇四、臨川書店）

「點頭宇奈豆ス」

●『名義抄』

佛下本云、「點頭ウナツク」。佛下本云、「領ウナツク（中略）領許ウナツク」

●『色葉字類抄』中黒川本。

如々「領ウナツク領ウナツク點ウナツク已上同（領は領の誤りか）。必オと「領許ウナツク」點ウナツク領ウナツク同（領口領の誤りか）。

\*右の古字書の用例を検討する。點頭は額（ミタム）と頭（カシラ）の類似から生れたものであろう。書紀や『葛葉』には見當らない。領（カン）漢音（吳音）、領（カン・ゴン）、領（カン・ゴン）は通用字であり、「うなづく」の意あり。領許の領はくびの意がある許は遊仏空虛に「聽許（エルスコト）」「幾許（シコハク）」「作許（シコハク）」「那許（ナヨ）（ト）ナヤマシラシテ」等許についての用例がある。ただ領許をうなづくこと訓に例が未詳。

「うなづく」の訓を持つ漢字は次のものである。

●領 『說文解字』九上「領 低頭也」从頁金聲 春秋傳曰迎于門領之而已（段注）低當作低 低者說文之低字也 左傳襄公六年衛獻公及國大夫逆於竟者執其手而與之言道逆者躬車揖之逆於門者領之而已釋文領本又作領 按依許慎則領領

皆非也。杜注揺頭亦非。〔中略〕釋文本又作領。正是本文作領之譌。列子湯問曰。〔巧夫〕  
領其頤。則歌合律。郭璞游仙詩。共屋領其頤。注引列子亦作領。引廣雅。領動也。領  
皆領之譌。故云。本感反。若本領字。則當云胡感反也。領其頤者。開口則低其頤。靈光殿  
賦。領若動而濺流。今本亦領。〔說文解字詁林〕云。領字。說文。頤。胡感反  
とする。領字。〔說文〕に。醜黃。といひ。胡感反とする。領とは音義を異にするといふ。後世領領  
頤は混用して同義に使われるようになったことが宋代の『集韻』等に見られる。郭璞の「游仙詩」  
は『文選』卷十（今善法、六臣注）所收。靈光殿賦は王逸の「言靈光殿賦」。『文選』十所  
收。

・領頤 『漢書』八十七楊雄傳。五十七下。鐵頤。推頤。漱。連流。湫。〔注〕師古曰。領。曲頤也。音欽。〔  
說文通訓定聲〕所引。漢書。標點本。功。和刻本。を。楊雄「解嘲」。「鐵頤。推頤。漱。  
唾。流。沫」。〔頤は頤に同じ。あまゝれ鼻低く。涙とつばをあめのように流す。大漢和辭典〕。領頤の  
うなづくの解は誤りか。

(27) 〔帯木〕〔紫〕一〇九。二三。河二四。大成一。新釋一。

〔紫〕おほせ木のむらのにくみのよろつ物の物を心いませせて  
つくりいたす也

・明王之は人如巧匠之制木。直者以為輶。曲者以為輪。長者以為棟。梁。短者以為椳。楨。楠。  
無曲直長短。各有所施。明王之は人亦猶如是也。智者取其謀。愚者取其力。史記

〔考證一〕

○『帝範』上 審官篇(104) 官内省藏版)

「故明王之任人、如巧匠之制木、直者以為轆、曲者以為輪、長者以為棟梁、短者以為枅、稱(注下古學反棖也)、椽也、上居家及爾雅、楫謂之楫也、大者謂之枅也、楫、椽木於地、所繫半也、無曲直長短、各有所施、明王之任人、亦猶如是也、智者取其謀、愚者取其力、(紫明)、史記、を無據とするが、帝範の誤りであらう」

●『明文抄』二 (『續群書類從』八八六 30 輯下 457)

「明王之任人、如巧匠之制木、直者以為轆、曲者以為輪、長者以為棟梁、短者以為枅、稱、無曲直長短各有所施、帝範、良匠無棄材、明君無棄士(中略)、君擇臣而授官、臣量己而受職(已上同)」

●『玉函秘抄』上 28 (遠藤光正『玉函秘抄語彙索引』並に校勘、無窮会東洋文化研究所)

「良匠无棄材、明君無棄士、帝範」(影印本の傍訓不鮮明を所記せず)

●『管蠡抄』四、不捨士(龍門文庫藏)

「明王之任人、如巧匠之制木、直者以為轆、曲者以為輪、長者以為棟梁、短者以為枅、稱、無曲直長短各有所施、明王之任人、亦猶如是、智者取其謀、愚者取其力(中略)、故良匠無棄材、明君無棄士、帝範」

(28) 『帝木』(紫) 29 オ、24 上。河ニ 43 オ、22 下。大成 47。新釋 149。

〔紫〕人の見をよはぬほうらいの山あらうみのいかれるいを  
のすかにかうくいのはけしきけ物のかたうぬにみえぬお  
いのかはすとのおとくしくつくりなる物は心にまかせて  
ぬにみえぬおにのかはすとのおとくしくつくり  
いてはらものは心にまかせてひときはぬおとくし  
てしちにはいさうめとらてありぬへし

ひとへに人のめをとおかしまことにはくらめとてありぬしよのつねの山のたすまひ水のなかれぬにかき人のいゝあありまをきけいと見えてなつかしうせばらけてしつかにかきませてすくよかならぬ山のけきこふかくよはなれてたひなしりちかきまかきのうちをほその心しらひをきてなごまご人上手けいとさきほことには難物ゆをよはめ所おほかる心しらひ心つかひ

韓子曰客為齊王畫者問之畫孰最難對曰狗馬最難孰最易曰鬼魅最易狗馬人所知也旦暮於前不可類之故難鬼魅無形者可類故易

韓子曰客為齊王畫者問之對曰狗馬最難鬼魅最易狗馬人所知也旦暮於前不類之故鬼魅無形者可類改易  
文選曰畫鬼魅最易成好畫狗馬難為好三都賦  
〔考證〕諸本本文に異同あれと略之。

〔金剛〕一見詩篇謂言凡俗 (33)。(一) 〔眼〕一見詩篇謂言凡俗 (81)。

〔眞福〕一見詩篇謂言凡俗 (107)。(陽明)一見詩篇謂言凡俗 (107)。

〔版本〕一見詩篇謂言凡俗 (16)。(一) 〔名義抄〕一凡俗タヒトワロ人 (佛上カケ)。

〔韓(非)子〕外儲說左上第三十三 (藝文類聚七十四巧藝部畫論) 太平御覽七五二工藝部畫上九三三上④ (四部叢刊) 卷十一外儲說左上第三十三 (九)。

韓子曰客為齊王畫者問之畫孰最難對曰狗馬最難孰最易曰鬼魅最易狗馬人所知也旦暮於前不可類之故難鬼魅無形無形者不可類故易 (藝文類聚) 御覽と本文の異同有之。

○〔幽(遊)仙窟〕  
てあろう。  
○〔裴(豊)成〕文選に見えず。和語

「客客」有爲齊王畫者。齊王問曰畫孰最難者曰大馬難。孰最易者對曰鬼魅最易。夫大馬人所  
知也。且莫有鑿於前不可類之。故難。鬼神無形。有不鑿於前。故易之也。〔四叢〕附訓。『蒙明』河  
海の底本は『藝文類聚』系統の本文と考えらる。

○『文選』三都賦。現行本未詳。

●唐・張彦遠『歷代名畫記』卷五、晉・顧愷之（『太平御覽』七五一、工藝部、書下、333上④。谷口鉄雄  
編『校本歷代名畫記』（中央公論美術出版）卷五、37）

「歷代名畫記」曰晉顧愷之字長康。字愷之。嘗言畫人物最難。山水、犬、馬、臺閣（一定器  
耳。若爲景也。斯言獨之。至於鬼神人物。有生動之可狀。〔下略之〕）〔御覽〕附訓。校本と異同多し。

(29) 『帝木』一葉。30、34下。河二行。22下。大成。新釋（10）

〔葉〕つらつえつきてむかひのり

・文頼ツラツエツク

〔河〕つらつえ 吟苦支頼曉燭前 白氏文集

〔考證〕諸本本文に異同あり。

○『白氏文集』卷十七 十年三月三十日云々（金澤本49、那波本286）

「醉悲麗派春盃裏 吟苦支頼曉燭前」（支頼はほほえとつく意。頼は願の異體字。

願は入層校本萬葉集、四伏名白詩（見）

●『色葉字類抄』支頼

吟苦支頼 曉燭前 白氏文集

○『古今集』十九 雜體必題しらす 大輔

○『古今和歌』帖四、さみの思那返し（一）つらつえ、新編国歌大観二、私撰集）

(30) 〔帶木〕(紫一三)。河二廿五。二二上。大成傳。新釋(外)

〔河〕心つきざく

開(關)晴遊仙窟 無心月充字

考證

○『遊仙窟』

・「醜」→「眼細強」開情コロツキ(14オ6) 「發意開情コロツキナル」(16オ3)

・「真極」眼細強コロツキ開情コロツキナル 「發意開情コロツキナル」

・「隱明」眼細強コロツキ開情コロツキナル(19オ3) 「發音心開情コロツキナル」(21オ3)

・「刊本」眼細強コロツキ開情コロツキナル(27オ) 「發意開情コロツキナル」(30オ5)

\* 開は關の異體字。開(開)と誤り易い。情と晴も草體で誤り易い。開情とするのが正い。心つきざくは氣にくわぬ。不愉快の意。開情は心にかかる。關心の意。

○『溫古知新書』コロツキナル「開情コロツキナル」

○無心月の充(宛)字としての用例未詳。

●『名乗字類抄』前田本「心着無コロツキ」(下10ウ)。黒川本「心着無コロツキ」(下10ウ)。

(31) 〔帶木〕(紫一30オ3・24下10。河二44オ3・22上11。大成傳。新釋(外)

〔紫一〕うとき人にみえは

・外人不見々可被咲 文集

〔河〕うとき人に見えは

・外人不見々應笑 白氏文集

〔考證〕

○『白氏文集』三上陽自發人河神田本。天理永仁元年鈔本。139金澤文庫本。141那波本

〔神田〕「外人不見見」應物オモツモノ「天理」外人不見ウチノキトハシラズ應オモツ嘆ウツクシキ

〔金澤〕「外人不見」應オモツ嘆ウツクシキ

●『名義抄』法下134「外人」ウチノキ人

(32)〔草木〕〔葦〕30オチ・24下。河ニ44オチ・22上。大成49。新釋(52)

〔紫〕おさまし。形遠 オソマシ 文選 〔河〕かくおさましとは 形ヲソシ 文選

〔考證〕

○『文選』出所未詳。現行本には見當らず。

●『温故知新書』必「形達」(ここに見える文が文選と考えられたが。)

(33)〔草木〕〔葦〕30オチ・24下。河ニ44オチ・22上。大成49。新釋(52)

〔紫〕われたけくいひそし侍い。教也

〔考證〕いひそすは度を越して強う言ふ。

\*教教と殺は異體字の關係。

●『色葉字類抄』黒川本中々々「教ソヌ又ソツ又ソナル嘆之愁也」

〔河〕いひそし侍い 言教いひそすほとこ  
詩に看教 愁教など多作之 至極したる  
心也



○看教 『世説新語』容止第九(世説新語校箋) 47。『晉書』卷三十六、列傳衛玠 106。④。『家

求』 衛玠羊車 眞福寺本古注蒙求)

・世説 『衛玠(中略)體不堪勞遂成病而死。時人謂看教衛玠』

・眞福寺本蒙求 47 衛玠羊車 衛玠列傳曰(中略)時人謂之曰看教衛玠

○日文選 二十九 1198 『百詩十九首之十四』(和刻本六臣注文選)

『百楊多悲風 蕭蕭蕭蕭 悲風入』

(34) 〔帯木〕(紫) 30ア・4下 4。河ニ4オ。 222上。 大成 10。 新釋(52)

〔紫〕「てをおりてあひみしことをかそふれは、こみひとつは君か

こみひとつは君かうきふし

・てをおりてあひみしことをかそふれはと

をといひつよつはへにけり 伊勢語

伊物 手をおりてへにけん事をかそふれは十といひつ、四はへにけり

請君屈指指數 百氏文集第二

〔考證〕本文かそふるにーかそふれば(音表紙本)

○『伊勢物語』十 手をりてあひみし事をかそふれはとといひつよつはへにけり

○『百氏文集』二、贈友詩五首之四(那波本89)。『白居易集』36、(中華書局の)

「請君屈指指數 十年十五人」

(35) 〔帯木〕(紫) 1。河ニ4オ。 222下。 大成 5。 新釋(54)

〔河〕みそれふる夜 雲 雨雲交下

〔考證〕

●『大廣益會玉篇』云、雨部三六七「霽」於京切、雨雲雜下」

●『廣韻』下平上六庚「雨雲雜也」(『互註校正宋本玉篇』)

●『和名抄』一、六三「霽」爾雅註云「霽、水雲雜下也」七見反、又作霽、和名美曾禮

●『霽』孫愜云「霽、雨雲相雜也」音於敬、反、文選「雲賦」師說曰「三曾禮」(元和古活字本)

●『名義抄』法下ノ「霽」(中略)「雲負、ミン」

(36)〔草木〕「紫」一也。河ニ44ヲ。22下。大成外。新釋(外)

〔河〕「水」かれまかりあかる、ところ 班 礼記 分散 頌 別 八雲抄云「あちちちゆく也」

〔考證〕「まかりあかるる」は「退出して家路につく意」

○「禮記」出所未詳。

●『國語』章氏「解」卷三、周語中「而班先王之<sup>テ</sup>大物、以賞私德」(注「班、分也」)(三國吳章)

●照注「學術名著」(世界書局)

●『名義抄』法中ノ「班」アカツ、ワカル、ワク

○『八雲御抄』卷四、世俗言「日本歌學大系」別卷三357

「あかる」(源じなどにも、あかり給といへるはあちちちゆく也)

(37)〔草木〕「紫」30ヲ。25上。河ニ44ヲ。22下。大成外。新釋(外)

〔紫〕「火」ほのかにかへにそむけ 〔河〕「火」ほのかにかへにそむけ

・ 歌、殘燈背壁影 蕭々 暗雨打窓  
聲 文集  
—— 歌、殘燈背壁影 白氏文集

〔考證〕

○『白氏文集』卷三、上陽白髮人（神田本、22頁行。天理永仁元年鈔本、22頁。金澤本17、13頁。那波本17、4頁。和漢朗詠集上、秋夜233）。

〔紫〕せうそをなくていとひたせもありにおはつかぢけれは  
消息 アルカケ日本紀  
アリサマ 白氏文集  
うきによりひたせもありとおもへともあみのうみけうちて、  
を見よ。和泉式部集

〔河〕せうそをもせて

消息 アルカケ日本紀  
アリサマ 白氏文集

ひたせもあり  
直隠 或菴宅

〔考證〕・せうそ、便リ・ひたせもあり、ひきともつてばかり居ること。

○『日本書紀』七、景行天皇十二年十月癸巳朔丁酉（音）（天理兼右本、22頁。國史大系22、23（前））

「因、以伺其消息也」（天理）

○『白氏文集』四、西涼伎（天理正應二年鈔本、22頁。金澤本、22頁。那波本、17、4頁）

「頻與為得新消息也。安洒路絶歸不得」（天理）

○『和漢朗詠集』上、早春、10頁。貞和本、『千載佳句』早春、8

「先遣和風報消息。續教啼鳥說來由」（春生）

● 『温故知新書』 195 「直隱」

○ 『和泉式部集』 224 (みやの御かへ) 『新編国歌大観』 卷三 1232

「うすきよりひたやくもりとおあへともあふみうみにもうちいでてみよ」

(39) 『帚木』 212 河三好々? 223 18. 大成 57. 新釋 (57.)

〔河〕 しほく 屢 論語曰 屢者數也 數をかきぬる心也 あまたたひ也

〔考證〕

○ 『論語』 公治長五 (『古注十三經』 論語卷五 22下)

「屢増於人 (何晏注) 孔曰 屢 數也」

● 『名義抄』 法下 87 「屢 カ句反 シハク」

● 『色葉字類抄』 下 前田本々々。黒川本 613。

(前田) 「屢 シハシガ 良遇反」 (黒川) 「屢 シハシガ 良遇反」

(40) 『帚木』 212 214. 224. 河三好々々. 224 18. 大成 57. 新釋 (57.)

〔葉〕 ちとこなりつるふえ 〔河〕 あてとりいていふきせらし

とういで、ちやなちしかけ もよしなとつしりうたふ

・あすかいにやとりほすへ

しをけかけもよしもひも

ちむしみまくるあよし

風俗通曰 笛武帝時丘仲所造或黃帝時伶倫造之云々  
悉曇藏詠文曰 笛七孔長一尺四寸 又曰 笛滌 滌滌邪穢納之  
雅正 第三元造曆云 伶倫造笛云 此乃取解谷竹 學鳳凰鳴

龍馬樂者之 笛有十二孔也二孔闕而不傳其九孔者以五音  
翰曰笛本四孔商聲若明復加一孔於下為商音 後出兼舊則

五音單備

〔考證〕

カケもよしなどやとりぬすしといふ心之 惟律 將鳥舟に(以下略之)

○法進(元明和銅二年八七〇九)一光仁寶龜九年八七七八)故事の出所未詳。『東大寺受戒方軌』等々著す。唐の人、戒律宗、鑑真に隨ひ來日。戒律、天台、儒書に通ず。『鷲尾順教』日本佛家人名辭典に等々據る。『悉曇輪略圖抄』卷五末に「這我皇帝臨大寶之五載、有前中府傳顯密教沙門法進」と(大正藏 842)の法進はこの人物であらう。

○『風俗通』卷六、聲音、笛(藝文類聚四、樂、笛)云。『太平御覽』六〇、樂、笛、①。『風俗通義校釋』(水)。

・一笛、漢武帝時丘仲所作也。笛、條也。所以條邪穢、綱之雅正也。長尺四寸七分(藝文)

・一太平御覽、兵八。樂、笛、一史記曰、黃帝使伶倫伐竹於嶰谷、斬而作笛、吹之作鳳鳴

○日本沙門安然『悉曇藏』卷二、(大正藏 842)云

「元造曆云、伶倫造笛、此乃取嶰谷竹、樂鳳凰鳴者也。笛有十二孔也。二孔闕而不傳、其九孔者以出五音。」

○『文選』卷十八、長笛賦、(李善注、爾雅本)云。初刻、古臣注、(一)

「長笛賦、并序、善曰、說文云、笛、七孔、長一尺四寸。風俗通曰、笛、條也、蕩、條、邪穢、

綱之雅正、(和刻)云。

同右「故本四孔以」者、明所加、後出、是謂、商聲、五音、(注)翰曰、笛本四孔、

商聲。君明復加丁孔於下。為商音。故云後出兼舊則五音畢備也。(20%)

●『教訓抄』卷八、管絃物語、管類、一橫笛(横笛)(日本古典全集下)

『漢武帝時』丘仲所造也。長一尺三寸。本者穴五也。伶倫造笛此即取解谷竹。學者鳳凰

吹解谷。是崑崙北谷也。律書樂圖云橫笛(音敵)和名(古布江云々)

○「催馬樂」飛鳥井 拍子九(『古代歌謠集』日遊(岩波全集))

「飛鳥井」宿(はす)はすべし。やおけ 蔭(かげ)もよし 御獲(ごとく)も寒し 御林(ごりん)もよし

「安須加為尔也止利波春也也於分可介毛与之 美毛比毛左牟之 美方久左毛与之」

(4)「帝木」(紫一シシシ下下下。河ニカカカ下下下。大成終。新釋(下))

「紫」あさわかくれけ 「河」あさわかくれけ 餘 魚 論語 解(アサラケキ)

・さかにも也よしは あさわかくれけ 同(事)

あはさ、け物也

「考證」「あさる」は肉の鮮度(アサ)が落ちてくずれる意。轉じてふぶける意。

●『名義抄』僧下カ「鱒」音乃アサル 鱒(アサ)奴罪及敗アサル。僧下名「鮮鮮」アサラケキ

●『色葉字類抄』墨川本下33オカ「鱒」アサル 鱒(アサ)同音餘魚敗(アサ)略鮮(アサ)仙(アサ)腥魚(アサ)

○『論語』十、郷黨十(『論語注疏』。北野學堂所藏集解本(和刻經書集成正文之部)156

「魚(アサ)敗(アサ)肉敗(アサ)不食(アサ)(北野)

「魚(アサ)餘(アサ)而肉敗不食(注魚敗曰餘)(注疏)」

(42) (帶木) (莖一) 引う。25下15。 (河二) 46下13。 224下17。 大成543。 新釋(594)

〔紫〕 箏のことをはんしきてうはしらへて 盤涉調也

〔河〕 さうのことをはんしきてうはしらへて

風俗通曰秦聲也涼州箏形如瑟不知誰改或曰蒙恬所造五絃築聲并或曰秦聲善箏者故曰秦箏

釋名箏施絃高箏々然

或物云漢恭帝使素女鼓五十絃琴聲悲帝禁不得破琴為二十五絃一文三尺秦始皇時破二十五絃今箏是也昔以竹造之其後以桐造之也

〔考證〕

○ 風俗通 卷六 聲音 箏 (藝文類聚 四 樂 箏 箏 初學記 卷十六 箏 990)

「謹案禮樂記箏五絃筑身也。今并涼二州箏形如瑟。不知誰改也。(藝文類聚)」

「箏秦聲也。或曰蒙恬所造。五絃筑身并涼二州箏形如瑟。(初學記)」

○ 曹植 琴瑟引 (初刻六臣注) 文選 二十七 421

「秦箏何慷慨。齊瑟和且柔。(注) 銑曰。秦人善彈箏。齊人亦善鼓瑟。」

○ 釋名 卷一 箏 施絃高箏箏々然 (藝文類聚 卷四十四 箏 944)

○ 史記 卷十二 孝武本紀 「或曰。秦帝使素女正羲。秦帝謂大吳伏羲氏。鼓五十絃。瑟非心。帝林亦不止。故破其瑟為二十五絃。(標點本 40) 通典 四 樂 瑟引用の「世本」

○ 十三絃 秦始皇以下の文の出所未詳。次の書が参考になる。 「太平御覽」 五七六 箏 367 所引「風俗通」

「太平御覽」 五七六 箏 367 所引「風俗通」

「風俗通曰：護按樂記，箏五絃筑身也。今并涼箏，形如瑟，不知誰作也。按京房制五音唯加瑟十三絃，此乃箏也。今雅樂箏十二絃，他樂皆十三絃，如箏，小曰雲和，樂府不用。」

○「隋書」卷十五，志十，音樂下（標點本功②）

「絲之屬四」曰琴，神農制為五絃，周文王加二絃為七者也。（中略）四曰箏，十三絃，所謂秦聲，蒙恬所作也。（「文獻通考」卷三七，樂十三絃，箏，通本參照）

○箏：以桐造之，出所未詳，次の書參照。

○「毛詩」卷三，廊柏舟，詁訓傳四，十三經古注，注疏，藝文類聚八八，木上桐似之。

「梧桐梓漆，爰伐琴瑟。」（注）可伐以為琴瑟。

「詩義疏」：「海青桐赤桐，白桐，白桐宜琴瑟。」（藝文類聚八八，桐似之。吳陸璣曰：毛詩草木鳥獸

蟲魚疏上66の叢書集成新編④）

（43）「草木」紫（22）名も。河ニテ。大成59。新釋（60）

「紫」すきはめらん女には心をかせ給へ

・貞節不撓 晉書文

「考證」撓は撓であらう。

○「晉書」文未詳。

●「文選」四七，晉表宏「三國名臣序贊」：「崔生高朗，折而不撓。」（注）向日，撓曲也。（和刻

・同右五十九，梁王巾「頭陀寺碑文」：「無為，寂不撓。」（注）善曰：撓，亂也。（同788）

「本立臣注」のり



●四名義抄に佛下本々「撓タハムミタルタラヤカナリ」。佛中々「嬾タラヤカナリタハム」。嬾タハム  
 ・佛下本々「摎タハム」。法中々「禡裏 音嬾タラヤカ 裏裏タハム本」。撓はみだす、まげら、  
 たれむ等の意。嬾はしなやか、みめよいの意。嬾嬾はしなやか、うつくしい意。嬾嬾と裏裏は  
 同意。しなやか、弱い、美（いよよ）。

\*「すきたはめらん女」の意は次の三書の注には次のように解す。

・「對枝源氏物語新釋」(二九五三、四三三)「風流におほれてある女(平凡社)」

・「源氏物語」(一九九三、一三〇)「好色にしなだれかかっているような女……たれむは、重きに耐えられずい  
 しなう。戯れるといふ意味の「たれむ」(四段)という語があるかもしれぬ。(新日本古典文学大系55)

・「源氏物語」(一九九四、三三)「たれむは、しなやかい曲色の命令形に完了の「り」  
 の未然形と推量の「む」が加わったもの。色はくまよよしているような女(日本古典文学大系55)  
 色好みでくまよよと品をつくる女またはたをやかな女の意となる。